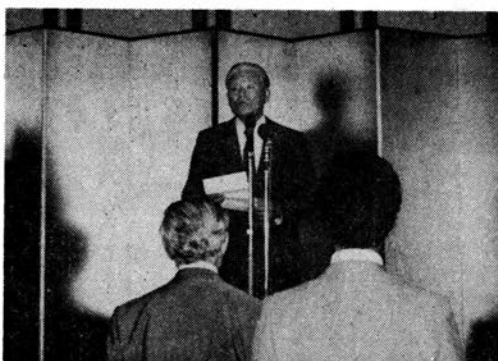




祝賀会で祝辞を述べる大平正芳首相

大平首相の祝辞は次の通り。

去る五月二十六日、高輪プリンスホテルにおいて本会のチョモランマ峰登頂を記念する祝賀会が盛大に催された。来賓を代表して祝辞を述べた大平正芳首相のあと、読売新聞社の務台光雄社長は、「私自身若かりし頃登山に情熱を燃やし、徳本峠を越えて槍ヶ岳に登ったり、大学を出てからは喜作とともに槍ヶ岳から奥穂高へ縦走した経験があり、それだけに登頂成功の報には一層大きな感銘を覚えた」と挨拶があり、今回のチョモランマ登山を読売新聞社が全力をあげ後援した、その原点ともいえるようなものを披露した。

「日本山岳会チョモランマ登山隊が、今般世界の最高峰チョモランマに登り、前人未登の北壁からの登攀と北東稜からの登頂に見事成功したされました。私はこの快挙に大きな感動を覚えたのであります。皆様もご同感であろうと存じます。私は西堀栄三郎総隊長以下隊員および関係者各位に対し、皆々様とともに心からなる敬意と慶祝の意を表明するものでございまして、きびしい気候状況の中にございまして、不屈の闘志と逞しい努力で一步一步氷雪を切り開き、尾崎、重広、加藤の三君が遂に八八四八の最高峰の頂点に立たれたときの感激は、言語に尽くせぬものがあつたと推察いたします。もとよりこの登山史上に輝かしい一ページを飾られた偉業の陰には、多くの労苦を共にされました全隊員四十名の一糸乱れぬチームワークがあつたことは申すまでもござい

山をきれいに「ミ」は持ち帰る

去る五月二十四日の夜、成田着でチョモランマ隊全員が帰国いたしました。今度の計画につきましては、多くの会員諸兄姉に、直接・間接の御協力をいただきました。改めて、厚くお礼申し上げます。

第一が北東稜と北壁の二つのルートからの登頂です。これには成功いたしました。計画の当初から、隊を代表する登頂者がチョモランマの頂上に立つてもらうことによって、隊の登頂行動は果たしたと考えておりました。が、その通りに運びました。とはいへ、北壁では五月二日の午後、ホーンバイン・クロアール入口で、思わぬ表層雪崩が発生して、ちょうど、そこを登っていた、宇部明君がそれに巻き込まれました。固定ザイルの強度以上の力が加わり、それが切れ

チョモランマより帰って

渡辺 兵 夫

日山協など五団体主催で

本会のチョモランマ峰登頂

記念祝賀会開かる



1980年(昭和55年)

7月号(No. 421)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 本会のチョモランマ峰登頂
記念祝賀会開かる(1)
チョモランマより帰って(渡辺兵夫)(1)
今シーズンの八千米峰(上)(3)
山岳図書語る夕(4)
「鳥水の方法」講師 近藤信行氏
東西南北(5)
図書紹介(6)
上高地山研の利用を(山研委員会)(7)
報告とお知らせ(7)
第六回オリエンテーション(集会委)
北海道支部総会
第34回ウェストン祭
図書交換会について(図書委員会)
追悼 浜口巖根氏(8)
会務報告・ルーム日誌・会員移動(8)~(11)
図書受入報告(図書委員会)(10)
カット/松本慎太郎・吉阪隆正・宮下啓三

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

●夏休み 8月11日~16日

毎月のお知らせと留守番電話
各委員会ごとと会員宛発送しております。またお知らせは、通信費値上りなどのため六月から毎月第一月曜日(理事会)までに、翌月の行事を集会委員会がうけつて、一括して毎月第二火曜日に各会員宛発送します。会報には今までも同様掲載されますが、集会に於いてのみ会報をフォローします。
同時に同文のコピーを留守番電話に録音します。(電話番号241-665九)ここに電話すれば翌月の山岳会の活動がわかるようになっております。ご利用下さい。
(集会・中川)



会員藤山愛一郎氏（後向き）と歓談する
ありし日の大平首相（祝賀会で）

今回の計画を遂行された日中両国のすべての関係者の皆様に對し、重ねて深甚なる謝意と慶びの言葉を申し上げたいと思

とであります。明日（五月二十七日）、華国録主席閣下の来日を前に、日中両国民の見事な協力で世界的な偉業を達成させたことは、両国の友好関係を一層緊密にする上から申しましても、極めて意義深いものがあったと思います。

西堀会長は登頂者と全隊員、それに日中両国の協力といった、日本と諸外国との関係を深め得た実績は、これまでネパール、パキスタン、インドなどでもみられるように、日本山岳会の伝統であり、これが今回も大きな力となった、と述べた。

登山隊員全員の署名した色紙が、

日本テレビ小林社長は中村隊員がチヨモランマ山頂に四キロの小型ビデオカメラ一式をかつぎ上げようとしたができなかったこと、しかし登頂隊員に密着したカメラは登頂者にしかわからない、いろいろなことをわれわれに見せてくれるであろうとその成果に期待をよせた。（この記録は前号会報でお知らせした通り、7月16日午後九時から二時間、日本テレビで放映された）

計画よりかなり低いところまでしか伸ばせなかったため、登頂時が日没ごろになり、VTRを上げて、映像はとらえられなかったでしょう。この一点を除けば、第二の目的も大体達成できました。ベース・キャンプ（五一五〇）に無線局をもつという画期的な試みを実行しましたので、私たちの山での行動が詳細に速報されました。帰国後説

ません。昨年九月以来の周到な準備、悪状況を克服する技術、自然条件の変化に耐える闘魂、登頂者を支える綿密な作戦、そのいづれを欠いても今日の成功を勝ち取ることができなかったに相違ないと思います。

雄大なチヨモランマを前にいたしまして、皆様が無敵状態の中で発揮された勇気と闘魂が、立場こそ違え困難と闘うわれわれにどれだけ大きな活力を与えてくれたことか。またわが国の国民一人一人が自らの社会生活の上で、勇気をもって難壁に挑戦することがどれほど貴重であるか、これを知らしめた登山隊の皆様の功績はまことに計り知れないものと確信いたします。しかも今回の世界的壮挙は中国政府をはじめ多数の中国人関係者のご理解とご協力によって為し遂げられたものであることを忘れてはならない、ということとであります。明日（五月二十七日）、華国録主席閣下の来日を前に、日中両国民の見事な協力で世界的な偉業を達成させたことは、両国の友好関係を一層緊密にする上から申しましても、極めて意義深いものがあったと思います。

登頂者の皆さん、今日のご成功を契機といたしまして、次の新たな挑戦に向けて一層のご精進を重ねられるようお祈り申し上げます。あ、私のご挨拶といたします。あ、私がとうございました。」

（大平正芳総理大臣は6月12日、急性心筋不全のため急逝されました。チヨモランマ登頂は、難壁に挑戦する勇気と活力を与えてくれた、と力強く話された元気なお姿をいま偲びながら、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。）

て約二〇〇〇メートルを落下、死亡しました。まことに残念な事故でした。隊の責任者として深くお詫びいたさねばなりません。チヨモランマ北面の自然に對する認識と知見の不足を否定するわけには参りません。しかし、宇部君の犠牲は無駄ではなく、その経験を生かし、全隊員の総力をあげて再攀を計り、重広、尾崎両君が見事に登頂してくれました。

第二の目的とは、報道活動と協力しつつ山を登る、ということです。とくに北東稜ルートは、VTRを頂上まであげて、世界ではじめてテレビで最高峰からの景観をとらえよう、という試みでした。この方も、八七五〇メートルまでは中村進隊員のたいへんな努力で成功しましたが、それ以上は残念ながら断念いたしました。加藤、中村両君が最大の努力を払いましたが、最終キャンプ（C・八二五〇）が計画よりかなり低いところまでしか伸ばせなかったため、登頂時が日没ごろになり、VTRを上げて、映像はとらえられなかったでしょう。この一点を除けば、第二の目的も大体達成できました。ベース・キャンプ（五一五〇）に無線局をもつという画期的な試みを実行しましたので、私たちの山での行動が詳細に速報されました。帰国後説

売新聞の記事をみて、隊員たちが驚いておりました。北東稜も北壁も、現地（北京）時間午後九時前後という登頂で、帰路は不測のビヴァーク（約八七〇〇）前後の地点をやり、結局二日間で、文字通り、ハラハラさせられました。その模様がそのまま速報され、さぞ日本でもたいへんだったろうと思います。どうも、胃や心臓によくない登り方をしてしまいました。最終キャンプ以上の行動は、我々の計画ははずれどうしであって、目標としていた「きちんとした登山」から、いささか逸脱してしまいました。しかし、登頂攻撃参加の四隊員の超人的頑張り、冷静な判断で見事にこの難局を突破して、元気で帰ってきました。サポーターに参加した隊員、そして各キャンプにいた隊員、全隊員が全く心を一つにして、この二つの登頂にそれぞれ任務を守り抜きました。私は、このような立派な隊をあとにすることが誇りに思っております。

第三は、中国の人々の協力をえながら、日中友好の実をあげ、かつ楽しい山登りをやろうという目的でした。この点は、相手あってのこと、で、軽々しくわれわれだけが評価してしまうわけにいかないところですが、

主催者団体のそれぞれの代表に贈呈されたあと、渡辺兵力隊長からは挨拶および隊員一人一人の紹介がおこなわれ、その中で北壁ルートが高見隊員の偵察時および今回にわたる綿密な観察によりできあがったものであり、高見ルートとも呼べる、と高見和成隊員を紹介した。

乾杯の音頭をとった日山協の今井田会長は北京の祝典に参加し、このチョモランマ登山が日中親善と友好促進に大きな貢献をなしたことを雰囲気から感じとることができた、と述べた。

王曉雲公使の祝辞や歓談のあと、スライドにより北面からのチョモランマの印象的な写真が何枚か映され、一九三八年以来自由圏諸国から遠ざかっていた景色を、参会者一同目のあたりにすることができた。(この写真展は7月29日から、東京銀座の松坂屋を皮ぎりに開催されている)

今シーズンの八千メートル峰

四月から五月にかけてのヒマラヤの八千メートル峰が今シーズンほどにぎわったことはかつてないことであつた。日本山岳会のチョモランマ登山をはじめ、エヴェレストには、ポーランド、スペイン隊がネパール側から登山、ことにポーランド隊は二月の厳冬期に引き続いてのもので、サウス・ピラーから

北と南から世界最高峰の頂上に二回立った加藤隊員は、頂上直下八七五〇メートル付近でビヴァークをしたが、ビヴァークすることに緊迫感がなかったこと、星がきれい、何とかして写真に撮れないかと思つたことなど語り、尾崎隊員は雲海の彼方、日没寸前の太陽に心をうばわれたことを語り、重広隊員は犠牲者のでたことを忘れ、第三次アタックは最初のアタックだという考えで登るよう配慮したと語つた。

いずれの隊員も自分達の登山が多勢の仲間のサポートにより達せられたことを話していた。司会者からの誘いで、北京の祝典で披露したという隊員達ののがこの会場でも披露され、しめくりに西堀会長の音頭による登山隊員全員の「雪山讃歌」合唱が会場に響き、午後五時三十分閉会となった。

(写真と記録・岡沢)

の登山という輝しい成果をあげた。スイスのダウラギリ登山など十四人の隊員とシェルパ三人という大量登山で、ことに最年長者は五十四歳。四十歳代の登山者も多いことが注目された。

今年のネパール・ヒマラヤは十五カ国、三十四隊、三百五十人のクライマーが集つたと伝えられる

が、八千メートルのジャイアンツにほめて、外電からその成果をメモしてみた。後世の登山史家はこのシーズンを一つのエポックとして大書するに違いない。

・マナスル(八一五六)

韓国東国大学山岳会隊(李仁植隊長ら八人)四月二十八日、JACの東北氷河ルートから徐東煥とシェルパ二人が登山。韓国にとつては一九七二、七三、七六の挑戦に次ぎ四度目の執念が実つた。ことに七二年には安久隊員、シェルパ十人を含む十五人の犠牲者を出していた。一九八五年には南西壁からエヴェレストをねらうという。

・アンナプルナI峰(八〇九一)

西ドイツ隊(グスタフ・ハーダー隊長)北面より五月一日、ハーダー、コンラッド・シュタルトメイヤール、五月三日、カール・ハンズ・シュラグ、ウォルフガング・ブログ、シェルパ二人が登山。頂上からスキー下降を計画していたが危険なため七四五〇メートルの第六キャンプからスキー下降する。(昨春フランス隊が頂上からスキー下降し一名が死亡している)

・エヴェレスト・チョモランマ(八八四八)

ベース・キャンプ以上で、約三カ月近く寝食を共にした数十名の中国人人々とは、たいへんうまくいったと確信しており、す。はじめのうちは言葉の問題や日本人の山での行動に中国側も不馴れであつたことなどから、多少はギクシャクしたところもありましたが、お互いの心が判りだしてからは、山仲間意識が自然に芽ばえてきて、スローガンの日中友好意識は何処かに消えていった気持ちでした。

北東稜も北壁も、若い高所協力要員の人々の積極的な荷上げ協力があつたことによつて、当初はややくれ気味であつた行動が、後半にきて一気にはなをあげ、五月上旬の好天候の時期に八〇〇〇メートル以上の行動が出来るようになりました。中国側の協力なくしてはチョモランマに出かけられませんが、その登山ということになる、一緒にやるんだ」という日中仲間間の心気が一本にならないとむづかしいと思ひます。

もちろん、登山に対する価値観は両者に大きな違いがあるでしょう。私たちはスポーツとしての登山を、彼等は国家の仕事として日本隊への協力を、という理解にたつていてといえましよう。しかし、この土台のちがいが、山の生活のなかで、こ

く自然に、「一緒にチョモランマの頂上へ」という気持と行動とに具現してきたように思えてなりません。

二つの登山の前後には、ベース・キャンプでも、何回か中国の人々と肩をだき合つて涙をこぼしました。それが、実に、自然な振舞いなのです。チョモランマのような大きい自然の中で、人間は意外と純心なものだと思ひました。中国側は毎日我々の行動を北京へ報告していたようです。その結果かどうかは、詳らかではありませんが、五月二十三日、北京に着した全隊員歓迎の会合を、華国鋒主席が人民大会堂で開いて下さいました。スポーツ関係として、華主席と会したのはチョモランマ隊がはじめてだということでした。チョモランマしか見ていないところでの、私たちの間柄が、日中友好の新しい一つの場面になつたのでしょうか。

チョモランマ行は終わりました。JACの日常活動からみますと、「はしか」のようなもので、登山許可(五四・七・六)からわずか十カ月で、この大きい計画を終ることができました。多くの方々の御協力の結果です。心からお礼申し上げます。

チョモランマより帰つて

日本隊(渡辺兵力隊長ら四十人)五月三日加藤保男東北稜より、五月十日未登の北壁より重広恒夫、尾崎隆登頂。五月二日北壁で宇部明隊員墜死する。加藤隊員は一九七三年東南稜からの登頂に次いで二度目。(登頂二十一隊目)

スペイン・バスク地区隊(フアン・イグナシオ・ロレンテ隊長ら十二人)五月十四日、東南稜よりマーチン・ザブレタ・テルブルと



バーモント (USA)/吉阪

シェルパのテンバがサウス・コルから十一時間で登頂。(登頂二十二隊目)

なおスペイン・カタルン地区隊(リカルド・コッツ・トルラス・マレンサ隊長ら十四人)も西稜からのローツェ登頂とエヴェレスト登頂をねらったが、五月十五日ローツェの七九〇〇地点で雪崩のため隊員二人が負傷、シェルパのパスン・ニマが死亡、五月二十二日、第四キャンプでモンスーンが迫ったため計画を中止。

ポーランド隊(アンジェイ・ザヴァダ隊長ら十九人)未踏のサウス・ピラー(東南稜と南西壁の

中間にある岩稜)を攻撃、五月十八日、アンジェイ・シユオク、ジェルジー・ククシユカの二人が八六〇〇の最終キャンプを午前二時出発、無酸素で深雪と闘い、午後四時登頂。二十三隊目。延べ百十二人が頂上に立った計算となる。

・カンチエンジュンガ(八五九八)

山岳同志会隊(小西政雄隊長ら七人)五月十四日、未登の北壁から無酸素で深田良一、川村晴一、坂下直枝、鈴木昇己、サーダー、

山岳図書を語る夕

鳥水の方法

講師 近藤 信行氏

三月十三日夜、昭和五十四年度の山岳図書を語る夕が開かれた。小島鳥水全集の刊行を記念して、同全集編集委員の中核として精力的に仕事をすすめている近藤信行氏から、全集刊行の苦労話や鳥水の人間像など、みり豊かな話をきくことができた。参加者は、近藤氏の執拗な探究と鳥水への傾倒ぶりに圧倒され、収穫の多い一夜だった。

山崎安治氏の日本登山史への執念そのほか、密度の濃い仕事は山岳界でもいくつかあるが、近藤氏の鳥水研究は、氏の文芸雑誌編集者としての長い経験に裏うちさ

アン・ブルバ。五月十七日大宮求、坂野俊孝、ペンバ・ツェリン、ダワ・ノルブ、計九人が登頂。一九五五年英国隊(西南壁)、七七年インド隊(北東稜)、七九年英国隊(北稜)に次ぐ記録。

西ドイツ隊(カール・ヘルリヒコフラー隊長ら二十人)五月十五日、西南壁イギリス隊ルートからジョージ・リッター、シェルパのニマ・ドルジェ、ラクパ・ギャブルの三人が登頂。アン・ジャンプは八五〇〇で酸素が切れたため断念。

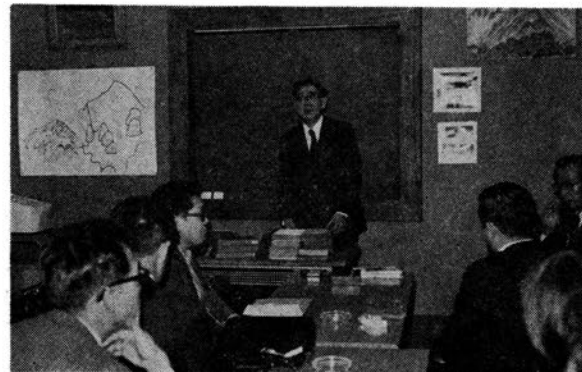
(山崎安治)

れ、最も正当的なテキスト・クリティークを踏まえて、文学研究の分野でおこなわれている実証的な方法を山の世界にはじめて持ちこんだ点でも画期的なことであろう。冒頭、島田異氏が、山だけではカバー出来ない多方面で活躍した鳥水について、適切な人が適切な方法で研究をおこなっているのは喜ばしいと挨拶、かつて横有恒氏が、他日だれかがこの卓越した先人の業績と伝記をものにされることを希望すると述べられたことを引用、歿後三十年にして鳥水は近藤氏によってキリストのように復活したと愛情と謙遜をこめて紹介

された。

近藤氏の講話概要

鳥水の全体像にどこまで迫れるか、自信はなかったが、正宗白鳥や水上勉などの仕事に刺激を受けてどうにかまとめることができた。「山岳」の小島鳥水追悼記念号の横、松方氏らの論旨、昭和三十六年横浜でおこなわれた小島鳥水展の資料、さらには、信州上田で滝沢秋曉宛の鳥水書翰五十五通を見たことなどが、鳥水と取組むことに大きなはずみとなった。また、大修館版「覆刻日本の山岳名著」の好評により、鳥水全集刊行の機運が芽生え、困難をのりこえ



「鳥水の方法」を語る近藤信行氏(滝川清氏撮影)

て刊行出来た。すでに戦前、梓書房の岡茂雄氏が鳥水全集を企画し、小林義正氏なども強く希望していたことがあったが、いずれも実現されなかった。鳥水は、岡氏宛の書翰で、完全な山の文集を残したいと全集への抱負を語っているが、今度の全集刊行に際しては、完全なテキスト・クリティーク(原本考証)がおこなわれたいと意味がないので、原稿にまでさかのぼって考証すること、それが不可能な場合は、初出文と厳密な対照をすることを最大の目的とした。山の本は、どういう訳か誤植が多く、鳥水の数多い文集も、その点で考証に難儀することが多い。鳥水全集がこれから先、何回編集されることになるかわからないが、資料の収集とテキストづくりを目的として、今後のために完璧なものにして予定の期間内に完了させたい。初期の資料に困難が多く、なかでも存在は知られているが見た人がいない学校時代の同人文学雑誌「小松文庫」など、貴重なものに不明なものがある。また、ペンネームをいくつか使いわけている。ひとりではかり書いていると思われることを避けたためかもしれないが、その全部が

究明されているわけではない。のちにラスキンを翻訳した形跡があるが、その訳者名義も鳥水かどうかはまだわからない。

わからないこの一つに、鳥水の言葉づかいによるものがある。

『鐘ヶ嶽探険記』でも、絶頂、絶頂という言葉を使いわけていて、これも困惑させられることの一つ。

鳥水には、頼山陽などの影響があり、初期には和漢混雑文で、誇張が多い。漢文体による紀行文は意味がないと、文体に対して反省している時期があるが、鳥水の記事は絵画的色彩がつよく、新しい叙景文をつくりたいと願っていた。



東側から見た鹿島嶺 (3月末)/宮下

鳥水には、紀行文作家と研究家の二つの面があり、伝統的な紀行や地理学者の説などを綿密に読みこんで、新しい紀行文の創造と山岳美を追求しており、よくバランスがとれているといえる。鳥水は、蝶よ花よという文学生活にはなじまず、実生活を大事にしていたが、晩年には文筆生活への憧れがあった。

今度の全集でぜひ加えたかったものに、ウェストンの『日本中央

大山系横断記』の翻訳がある。

『日本アルプスの登山と探検』の原本を借り受け、翻訳したもので、小島家に保存されていた。毛筆で書きとめられていて読みこなすのに難儀したが、第三回配本分に収録することが出来たのは、大きな収穫だった。

アメリカ時代の鳥水は、正金銀行支店長という当時の日本人社会のトップにあつて、経済人としての顔が表面に出てくる。二カ月間アメリカに渡つて当時の鳥水の事蹟を調べ、サンフランシスコの当時の居宅も確認できたが、まだわからないことは多い。アメリカ時代の鳥水は、山へ行くことを同僚に隠していたフシがある。また、帰国時に持ち帰った西欧のエッティングや明治期に流出した浮世絵が百万円という奢侈税をかけられて問題をおこしたが、これらのコレクションがその後どうなったのかもいまだにわからない。

明治の富国強兵政策の影響を受けながら、自由民権運動の大きな流れの中に身を置いていた鳥水は、日本の国土をつよく愛してい



三水区・鍋割山現地集会

久保孝一郎

四月十二日(土) 小田急線新

松田駅に正午一行十名集合、直ちにタクシーをつらねて宇津茂(ウツモ)部落・弥勒(ミロク)山荘の奥まで入る。途中、時節

がら満開の桜が美しかった。川原で昼食後一時半より歩きだす。寄(ヤドロギ)コシバ沢を

つめ、ヤブをこぎ、鍋割峠に出、これより尾根通しの急登を

ゆつくり歩いて、山頂小舎に五時半に到着した。

午後は一雨ありそうなる予報も幸いはずれたが、すでに雲が下りてきて、富士暮景は楽しめな

かった。しかし眼下に相模の野と海を見下ろす気分は壮大であ

る。小舎番の草野君は吾ら歓迎の準備万端完了、早速酒宴が始ま

る。肉鍋とアマドコロ、タラノ木ノ芽の天ぷら等の御馳走で、

小舎には吾らの宴会の終る頃に登山客がたった一人入ってきた

だけの、全く貸し切り同様。二

次会もまた山の花、草、木の話題を酒の肴にして盛んであった。

あくる十三日(日)は全国的に

低気圧の圏内に入るといふ予報通りに夜半からの雨で、朝倉後、丹

沢三ツ峰等遠出のコースを諦めて、鍋割山最短コースである後沢

乗越、神奈川県立登山訓練所経由林道を三々五々大倉バス停へと、

春雨の、時に強く時に弱く降る中を下山した。

表丹沢のメインコースからちょっと離れたこの山は比較的静かで、特に登路に使った寄沢側のコ



ースは程よく荒廃していて、足下の面白い、私の好きな路です。

また小舎番の草野君は高知大学林学科の出身、山が好きで好き

で、とうとう私の近所の同業(木材)の会社をやめて、前任の小舎

番が病没して閉鎖されたのを継いで、再開した次第。三十一才の働

き盛りの独身男、どなたか好伴侶を御世話願えれば幸と存じます。

また、末筆ながら、山梨支部の山村さんが新宿駅に御見送りのう

え、甘辛の両方の差入れを下され有難うございました。厚く御礼申上ます。(参加者 申込受付順 高田、岩堀、錦織、原、荒野、久保、他に友人家族四名計十名)

三水会の行事

(例会は毎回 PM 6・30 ~ 8・30)

◎六月十八日(水) 第72回例会 片桐盛久氏を開む

◎七月十五日(火) 第73回例会 ブラバント氏の山案内手帳

ゲスト 田口二郎氏

◎八月初旬第3回伊東城ヶ崎有志懇談会(家族歓迎) 温泉

付で会費(一泊二食付) 四千円、シツタカ貝、さざえのパ

ーベキユで薬湯を汲み、山を語る。定員次第締切ります。

◎九月六日(土) 山研で第4回現地集会 アンコロ餅と薬湯

を探る。翌日唐沢西穂の山行予定 締切八月二十三日 チ

ーフ坂本外

◎九月十七日第74回例会 西丸震哉氏に励まされる会

(交渉中) 係 高田、沼倉

山岳会あて

テレビ寄贈のてんまつ 沼倉寛二郎

6月4日三水会例会の「ダウ

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

た。なかでも富士山を、場所と高さと品位と三つの要素から高く評価しているが、大きな時代の中での鳥水の役割を理解する必要があると思う。」

散会後、あれだけ一つのことに入没し、打ちこめるのは、うらやましいことだという声が数多く聞かれた。

(記録・大森)

△出席者▽(順不同)
島田 巽、河野幾雄、金坂一郎、

原稿募集

山に関する原稿を会報編集委員宛にお送り下さい。原稿の取扱は編集委員会におまかせ頂きますが、原稿用紙(できれば一行を十五字にして)七、八枚程度。内容は幅広く、その一例としてユーモアある広瀬深会員の書かれた昭14年会報90号所載「熊の爪跡」の一部を

△武田久吉先輩が年に似合おぬ大きな重いリュックザックを背負って登ってきたのに出合った。
「この上に熊が樹に登った跡があります」
「それは珍しい」
「私も共に再び樹の樹まで引返して来た」
「写真を撮ろう」と武田さんは三脚を立て始めたが、急に欲を出して

油谷次康、中村純二、鈴木郭之、岩田晶、宇津力雄、菅野弘章、高田真哉、関塚貞清、斎藤健治、近藤 緑、滝川 清、北島光子、望月富士夫、村松紀夫、中村小一郎、西郷正郎、荒野康子、原 謙一、松家 晋、岡沢祐吉、伊藤博夫、大橋 晋、越田和男、中川恵資、石川治郎、河村栄二、和久井正明、山本良三、堀内章雄、千葉保之、武田満子、大森久雄

「熊が本当に樹に登っているところだったなあ」とつぶやかれた。
「熊の生態写真は余り見かけませんね」

「恐しいからな」
「山岳会の誰だったかが、いつか北海道で野生の熊の写真を撮ったというので、見せてもらった。引伸印画でも、白い雪の上に黒点があるくらいのものでした」
「それは愉快だ」

「冠さんも黒部溪谷で対岸のかもしの写真を撮ってきたと言うので、見せてもらった。小さくて目に入っても痛くないくらいのかもしかなので『これではのしみか』と笑ったことがある」

撮影準備が整って、シャッターが切られた。
「さて熊の足取りでも調べますか」
「熊の指紋も、とっておいたらどうです」
近くに熊がいないので、話はいつのどかだ。...

図書



紹介

Himalayan Handbook

by J. Sircar

二〇〇〇頁(六〇九六頁)以上のヒマラヤ全域のピークをABC順に整理し、標高、山城、一九七五年までの簡単な登山記録を付したヒマラヤ山名別登山年表ともいうような本である。登山記録についてはそのほとんどに出版が明記してあり、さらに詳しく調べたいときに便利である。

著者は数年前からヒマラヤ登山年表をこつこつと手作りして発表していた人である。今回、それらを元にして一冊の本として自費出版した。

カブルーとカブルー・ドームの山姿をシルエットで扱った黒と白のカバーから始まり、J・ロバートの序文へと続く。そして、A項のABI GAMIN からZ項の

当日知り、当惑の体をさらした次第。幸いわが社の役員から誇り高き山岳会に(明言した手前)おこがましいがテレビ寄贈の提言があり即決したものの、大型26型の在庫がなく、おまけにビデオ方式

が違ったりして、あわてふためく始末。然し五時まで山岳会に届けねばの上命令でやっとな功する。心よくテレビ寄贈を受け入れられ、目出度しめでたしのてんまつという一幕でした。

東西南北

ZONGOPHU KANG まで一六〇ペの間にヒマラヤの山々がぎしりとつまっている。無名峰を除く二〇〇〇以上のピークは網羅されているといつてよい。巻末には二つ以上の名前をもつ山のインデックス、文献リストなどが付してある。

か、筆者まで送金料、送料を含めて一五〇〇円をお送り下さい。
(Published by Ms. Rita Sircar, 79 Kankula Road Calcutta 29, W.B. India) (14×22cm, 168頁、30Rs)(沖允人 千468 名古屋市天白区一ツ山一四四一七 振替名古屋 七一二九番)

ヒンズー・クシュ 真つただ中

広島三朗著

ハリキリ・ボーイ、広島君の二冊目の著書である。カラコルム登山隆盛とともに、回教圏の山々が日本人登山者の目の前にクロウズ・アップされてから、すでに久しい。その間、日本からの登山隊はカラコルムでも、ヒンズー・クシュでも実に多くのピークを踏んでいる。その数では、世界の一、二を争う実績を持つ。しかし、あの乾燥地帯の苛烈な自然の中でしたかに生きる、オアシスの村々の住民たちの心情とか文化についてどれほどの理解が出来るか、これは甚だ疑問である。

登山隊の一員として動いているうちは、「ピーク」にばかり目が

シーズン到来!!

上高地山研の利用を

夏山シーズンの到来で上高地の宿泊は難しいとお考えの皆様、山研なら泊られます。観光地と化した上高地ですが、山研の付近はまだ静かです。山から下りて寛ぎたい方は、当日でも結構です。山研に行ってみて、「山麓」や「住民」への目は欠落してしまい勝ちになる。今回の広島君の著書は、その欠落をかなりよく埋めているのであるまいか。その意味では、本書は、かつてこの地——とくにヤシン・ギルギット地区——について書かれた本多勝一氏の古典的著作『知られざるヒマラヤ』(新版一九七二年)の流れをくむものといつてよい。本書が、本多氏の著作に対し、どれだけ「新たな発見」を加えているか、これは両書を読みくらべると面白いのだが、その評価は読者の皆さんの判断にゆだねたい。

よく知っている人や友人の書いた本を論評するのは、なかなか難かしい。私はすでに「岳人」(七九年十二月号)の書評で本書を取り上げたので、興味のある方には、そちらもお読みいただけたら有難い。

ただ、このことだけははっきり

電話で予約して下さい。旧知の会員、未知の岳人と静かに語り合い、生涯の支えを得ることもありましょう。

山研は山岳会会員の貴重な財産です。非会員も誘い歓迎に集会に大いに活用して下さい。なおキャンセルは必ずお電話を

(関塚)

◎上高地山研の電話 (0265) 3333

言える。回教園という日本人にはつかみにくい文化園の中で生きる人々に対する、広島君の目のくばり方や批評はなかなか的確である。また、ヒンズー・ラジ山脈の地形や氷河活動の特徴などもわかり易く書いている。これなども難なくこなしているようだが、本当は書きこなすのがかなり難かしい事柄であろう。ソツのない達者な文章である。

ただ私には、そのソツのなさや達者なところが本としては気になるところである。爽やかな本なのだが、苦味も深味も足りないのがある。広島君の旅は急ぎすぎである。ギルギット⇔チトラル間を十日から十二、三日で通過してしまうから、観察したことがらに対する結論も性急なものになり勝ちだ。

辺境の旅を、彼は「フレンドリー精神」で押し通したというが、実はこれとて、彼を迎え入れる側

に回教徒としての「客人歓迎」という社会的な枠組があつての故なのである。

B 6版 二二七頁 昭和五十四年九月 講談社刊 定価九二〇円 (雁部貞夫)

●報告とお知らせ

第三八八回 小集会

・第六回オリエンテーション

集会委員会

新入会員を対象としましたオリエンテーションも恒例となり、第六回を重ねるにいたりしました。

三月二十二日(土) ルームにて折井副会長をはじめ理事の方々の出席を頂きました。

山岳会に入会されても、ルームに顔を出した

事の無い方、

各催しに参加

された事のな

い方や会報等

の書類を受け

取るだけの会

員がかなりい

る事から、新入

会員の方々に日本

山岳会の紹介、

ルームの利用法、

クラブライフの

過ごし方などを

知っていただき、

積極的に山岳会

の活動の中に入

って来てもらいた



信濃路の山荘

席をいただきました。日本山岳会の歴史を混えて折井副会長より挨拶をいただき、中川理事よりルームの使用方法的説明があり、その後、各理事より担当の委員会等の説明がありました。

各理事のお話の後に交歓会を開き、自己紹介の中で山岳会に期待している事、山岳会の活動の中で参加していきたい分野等と言っていたが、きたんの無い意見を聞く事ができました。特に自然保護や科学研究委員会に興味を持つ方が多勢おいででした。又、日本山岳会にはスペシャリストしか入会できないものと誤解している方がまだかなりいる事が分かりました。

新入会員が主役のオリエンテーションにふさわしく、積極的に意見が交され予定の時間をオーバーしてしまいう程で大変有意義な会でした。しかし、少々残念であったのは理事の方の出席が少なく、新入会員の熱気に追されがちな事で、次回からはなるべく多くの理事の方に出席いただきたいと思ひます。

出席理事 折井健一(副会長)、中川 武(集会委員会)、高本信子(山研運営委員会)、鈴木郭之(海外連絡委員会・自然保

護委員会)、山口節子(婦人懇談会)、中村純二(科学研究委員会)

・北海道支部総会報告

北海道支部総会は、五月三十一日、札幌雪印パーラー二階レストランで開かれ、昭和五十四年度事業報告、収支決算承認。昭和五十五年事業計画、収支予算案が承認され、引続き支部役員を選任、左のように決まりました。

支部長 大塚 武 一九一四

支部委員 (副支部長) 山川 力 七四九一

(副支部長) 兼平治水 七〇〇五

自然保護 辻井達一 七〇三三

企画 新妻 徹 五八六八

事務局 平野 明 五三六八

会計 松沢節夫 八三三六

記録 高沢光雄 五三〇八

集会 浅利欣吉 五三三九

集会 酒巻吟一 五九七三

集会 川越昭夫 八一四八

集会 柳田涼子 七七九七

集会 亀井秀子 八四八六

監事 横江一郎 四〇四七

監事 金井五郎 七一六八

○新年度事業計画

○七月五、六日 夕張岳の高山植物を訪ねて

○九月二十、二十一日 観月会

○十一月 海外、国内山行報告会

○十二月 忘年会

○二月 ニセコスキーバス

等、日程を決め、引続き行われ

た懇親会は、ヒマラヤ髭の佐々先生、青年のように若々しい坂本画伯、井手先生、それに加えた若手連中の集りなので、用意されたビールは忽ち空いてしまう。二次会も屈強の若者に煙を巻かれ、賑やかに五月の夜は更けていった。

(出席者) 佐々保雄、大塚武、坂本直行、赤石喜恵子、兼平治水、お知らせ

・図書交換会について

第13回図書交換会をおこないます。
日時 10月25日(土) 午後2時
場所 日本山岳会ルーム

山の本、雑誌をご出品いただける方は、10月10日までに「出品書籍名、希望価格、会員番号、住所、氏名」を添えて図書委員会までお届け下さい。

た者は五百名ほどであった。強い日の差す碑前祭。

記念講演では、上高地バス開通時の自動車の警笛を、奥穂の天辺で聞いたショックなど折井副会長が語り、ウ祭をほぼ皆動した坂倉登喜子氏は演者となった名譽に感激しながら想い出を語った。

来年の第35回ウ祭は一つの節目として盛大に行いたいとのことであった。

大音師忠一、萩千賀、金井五郎、渡部盛夫、辻井達一、山川力、井手貴夫、浅利欣吉、柳田京子、亀井秀子、川越昭夫、泉亮、松沢節夫、大野秀樹、高沢光雄、石井忠雅、平野明、新妻徹(順不同)

・第34回ウエストン祭

今年も岩魚留小屋近くで、猿の群れを眺めながら徳本峠を越え、

なお点数が多いときは事前にご連絡いただければ運搬の手配をいたします。(山以外の本でも多少は受けつけます)

・ビールパーティについて

今夏のビールパーティは9月5日(金) 午後6時30分からです。皆様のおいでをお待ちいたします。

会務報告

支部長会議

(五月十六日(金))

午後三時 本会ルーム

出席者

北海道(大塚武) 山形(村上勝太郎) 宮城(伊達篤郎) 越後(斎藤平七) 福島(中島正夫) 山梨(大沢伊三郎) 静岡(山本朋三郎) 東海(中世古隆司)

浜口 巖根氏

(明三〇・九・二一) 昭五一・一一・八

会員番号二〇八番

昭和五十年十二月の年次晩餐会の折、会場入口に張り出されてあった会員短信の中に、このところ少々健康をそこねている由のご返書を拝見し、翌年一月会報に退会者としてのお名前を拝見。そしてその年の十一月、幽明境を異にされた。

昭和五年本会に入会されるまで、氏は熊本の第五高等学校で同期の岩永信雄氏等とともに山に親しみ、東京に移られてからも各所にその足跡を記された。昭和五十年十月、岩永氏や神谷恭氏、藤島敏男氏といった後年

岐阜(松井辰彦) 関西(今西寿雄) 東九州(野口秋人) 西堀会長、折井副会長、中島常務理事、中川常務理事

水野祥太郎名誉会員(元関西支部長) がゲストとして出席された。

▽懇談・協議事項

◎西堀会長挨拶・支部運営への常々の御苦勞、御協力に対し感謝申上げる。また今回のチョモランマ登山について隊員一名を失ったのは誠に残念であり、御遺族に対し御哀悼に思う。隊は所期の計画、目的を達成し、ベースキャンプを十四日に撤収し

名誉会員になられた方々の紹介で入会された。しかし同年十一月御尊父、浜口雄幸首相が兇弾に倒れ、好きな山登りも思うにまかせなかつたご様子。それでも御遺族のお話では、いつのまにか山へ行っているといったことも多かった由。

昭和七年ごろ、嵐で槍の小舎に停滞していた浜口氏一行を、翌日小舎主に依頼された早大山岳部の学生折井健一氏が、奥穂へ案内した。途中ジャンダルムを眺め小憩した南岳の頭で交わす折井氏とのピッケル談義から、ピッケルも名品を携帯しておられた浜口氏の様子が窺える。

それ以降、山から遠ざかりながらも、多くの会員がそうであったように、戦災や転勤があったにも

◎各支部長より報告

(岐阜) 支部会員一〇名登録。年間予算二十六万円程度で通常事業を賄っているが、別途約十万円で山岳講習会、映画会など開催し、会員を中心として地元の健全な登山指導・奨励を行っている。(福島) 県岳連と協力して、福島県登山大会の開催等で登山の普及、自然保護運動を呼びかけている。

拘らず、本会のマナスル遠征やルーム等の再建には心を留められ、そして数十年籍を置かれた日本山岳会にご自分で退会届を出され、同じ年飄然と死出の山へと旅立たれた。

些か時機を逸した親もありますが、ここに謹んで氏のご冥福をお祈りし、この稿をまとめるに当り御協力いただいた御遺族および御親族の大橋宗夫氏に、衷心より感謝申し上げます。

略歴 四中、五高、東京帝大日本勧業銀行入行、副頭取日本長期信用銀行副頭取

日本銀行行政政策委員 頭取、会長日本長期信用銀行相談役

(岡沢 記)

前支部長伊藤弥十郎氏の日誌その他の遺稿が自宅から発見されたので、これを整理して近く出版の運びになった。

(静岡) 支部運営について県岳連関係や会員の対応に苦勞がある。例年開催の紅葉会もマンネリ化した趣があり、原点に戻って考える時期になった等意見が述べられ、各支部の参考になった。

(東九州) 今年創立二十周年を迎えての記念行事について、五月の九重山での記念山行と懇親会及び十一月に「山と芸術」をテーマにした文化

展及び講演会(今西錦司名誉
会員)の開催を予定し、準備
中。

最近では若い会員の入会が多く
なり、現在約五十名が登録さ
れて気運が盛り上っている。

(宮城) 東京及び各支部との
交流パイプを太くしたい。会
員相互の親睦・交流がクラブ
運営上の活力である。

(東海) 支部創立二十周年を
明年に控えての記念事業とし
て、日本・ネパール国際親善
隊を七月派遣する。登山、技
術協力事業を長期的な展望に
立て、交流を意図して活動
を進めているので支援願いた
い。

(越後) 新潟登山祭(弥彦火
祭)高頭祭等毎年恒例の行事
に会員の参加をとの呼びかけ
があった。

(関西) 支部会員三二六名が
登録されている。
今年度秋の支部長会議と会員
懇親会を担当して、十一月二
十二日(土)―二十四日(月
・祝日)に丹波篠山で開催の
準備をしている。

(北海道) 道内においても中
国の登山計画があり、支援を
依頼されている。ネパールと
違って費用が意外に大きい。
チョモランマ登山の場合など
経費的なことも聞きたい。

(山梨) 隔月に小集会を開催
して支部会員相互の親睦情報
交換など実施。
①昭和五十五年除籍者名簿に
依り、当該所属の会員につい
ては継続或いは復活の勧誘を
今後も続けてお願いしたい。
なお三月一日現在調査で七十
九名の対象者があったが各位
の協力により二十六名が会費
を納入され、本日現在五十三
名が実際の除籍者となった
(三月三十一日現在では六十
三名)

②入会、住所移転等については
事務局でもよく連絡している
が、尚一層、本部・各支部の
事務取扱委員と相互連絡を
密にして、会員の掌握に努め
たい(支部からも提案)

③本会の行事案内について、会
報の掲載時では既に手遅れの
場合が多いので、今年度から
は取纏めての通知と事務局に
電話サービスを設置する事に
したので利用されるようお願い
したい(会報に利用要領を掲載
する)

④本会は基本的にクラブ組織で
あり、運営は会員相互の信頼
関係の上に成り立っている。
支部の創設にはそれぞれに違
った動機もあるが、その地方
の風土にあわせて特性を生か
した運営が望ましい。

また交流のパイプを太くする
ために近隣の支部が合同での
行事なども余裕があれば考慮
された。

6月理事会
(6月9日午後6時30分
本会ルーム)

出席者 西堀会長、折井、渡辺各
副会長、中島、飯野、中川、越田
大森、中村、小倉、岡沢、高橋、
鈴木、山口各理事、鳴原監事、山
崎、大塚、小原(時)、河野、金坂
各評議員

委任 川上、嵯峨野、菅沢各理事
村木評議員
●審議事項
▽第2回日米環境会議への本会代
表者の派遣の件(鈴木)
6月29日(7月1日に米国で開
催される。本会代表として佐々保
雄名誉会員を派遣する。承認)

▽オデール氏招待の件(西堀)
8月下旬に来日の見通しである
受入れ準備の責任者を渡辺副会長
に担当していただく。了承
●報告事項
▽海外連絡委員会(鈴木)
①8月末―9月初旬にサリン
氏来日予定、②8月下旬に中国登
山界の人たちが来日する(日本山
岳協会招待)、③モナスティールス
キー氏(パミール高原村長)が来
日を希望している。日程未定。
▽集委員会(中川)
・新入会員へ本年度から会長名の

あいさつ状を送付する。
・テレフォン・サービス(留守番
電話)が設置された。電話番号は
〇三―二三四―六六五九

▽医療委員会(大森)
・夏山診療所を今夏も開設する。
▽山研運営委員会(折井)
・営林署が水道取入れ工事を行な
うので、水道問題は解決する。
・山研借地の契約が9月で切れる
ので、営林署に期限延長手続きを
行なう。

▽その他
・ウェストン祭は6月1日に開か
れ盛会であった。(折井)
・チョモランマ登山の報告会を8
月に開く計画である。(渡辺)

あいつつ状を送付する。
・テレフォン・サービス(留守番
電話)が設置された。電話番号は
〇三―二三四―六六五九

▽医療委員会(大森)
・夏山診療所を今夏も開設する。
▽山研運営委員会(折井)
・営林署が水道取入れ工事を行な
うので、水道問題は解決する。
・山研借地の契約が9月で切れる
ので、営林署に期限延長手続きを
行なう。

▽その他
・ウェストン祭は6月1日に開か
れ盛会であった。(折井)
・チョモランマ登山の報告会を8
月に開く計画である。(渡辺)

あいつつ状を送付する。
・テレフォン・サービス(留守番
電話)が設置された。電話番号は
〇三―二三四―六六五九

▽医療委員会(大森)
・夏山診療所を今夏も開設する。
▽山研運営委員会(折井)
・営林署が水道取入れ工事を行な
うので、水道問題は解決する。
・山研借地の契約が9月で切れる
ので、営林署に期限延長手続きを
行なう。



ルーム日誌

(55年5月)

1日(木) 自然保護委員会
6日(火) 理事会
7日(水) 海外連絡委員会
16日(金) 支部長会議 55年度
総会(於私学会館)
21日(水) 三木会
22日(木) 図書委員会
26日(月) 書評委員会、チョモ
ランマ登頂祝賀レセ
プション(高輪プリ
ンスホテル)

29日(木) 婦人懇談会
30日(金) 科学研究委員会、チ
ョモランマ委員会
今月の来室者 三八六名
会員移動(5月)

物故
八五七 中島正文(55・4・2
82才)
九七六 額田 敏(55・5・1
87才)
三八三四 村上金吾(54・10・16
87才)
七二二七 柳 宏子(55・2・18
48才)
七四三七 松本節子(55・4・30
49才)
八〇一〇 野村俊男(54・12
74才)
八一三二 大林 胖(55・2・10
55才)
八六八〇 宇部 明(55・5・3
32才)

除籍取消
七七二二 内村泰久
退会
八三六七 秦 巖夫
支部変更
一六四四 宮島太郎(静岡へ)
五三三五 麻生国雄(北海道へ)
五八八二 保田信紀(〃)
八六九七 表 弘(〃)
四九八六 西郷正郎(静岡へ)
六〇六二 佐藤浩幸(東九州へ)

改名
四六一五 本間克彦→克二へ
七二六四 市川英夫→貴士へ

図 書 受 入 報 告

図書委員会

昭和 54 年 10 月受入れ図書 (つづき)

- 36 F. Younghusband "Everest: The Challenge" T. Nelson & Sons, 1945 (西堀栄三郎氏寄贈)
- 37 F.S. Chapman "Helvellyn to Himalayas" Chatto & Windus 1940 (図書交換会買上げ)
- 38 P. Fleming "News from Tartary" Jonathan Cape 1936 (同上)

昭和 54 年 11~12 月受入れ図書

- 1 日本カーバイト工業山岳部編・発行「部報第3号・藤岡君追悼特集号」1979 (山口得美氏寄贈)
- 2 慶応義塾大学アルペン・フェライン岳酔会「Rolwaling-Himal Kongde Ri 報告・1978」1979 (版元寄贈)
- 3 西岡一雄著「泉を聴く」サンブライツ出版 1979 (版元寄贈)
- 4 諏訪多栄蔵編「回想・西岡一雄」サンブライツ出版 1979 (版元寄贈)
- 5 高橋照著「秘境ムスタン潜入記」東京新聞出版局 1979 (著者寄贈)

●ペンダント頒価 銀製は四千五百円
洋銀製は二千円(送料各二百円)事務局



香月まゆみ

昭和五十五年七月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(20) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

印刷所

東京都港区赤坂一丁目三番六号
株式会社 技報堂